case study

敬愛大学国際学部の「海外スクーリング」

敬愛大学国際学部教授・国際交流委員長　家近　亮子
敬愛大学特任教員　石橋　嘉一

最近の傾向と今後の課題

敬愛大学国際学部では、学部発足（一九九七年）以来「海外スクーリング」を実施してきた。二〇〇一年から二〇一〇年までの研修先と研修目的及び内容は、以下のようになる。

本学部における「海外スクーリング」は正規の授業で、その目的は授業で学んだことを実際に自分の目で見て、確かめることにある。すなわち「百聞は一見に如かず」をモットーとしている。それぞれのプログラムは、原則として研修先の地域研究が専門の専任教員が発案・計画し、引率も行うことになっている。参加学生は事前講義を三回から四回ほど受け、研修先に関する基本的な知識と研修目的を学習する。また、研修参加後はその体験と事前講義を踏まえて、レポートを作成し、二単位を取得することができる。研修期間は一週間から一〇日が基本となっている。研修時期は通常夏休み、冬休み、春休みの長期休暇期間中となっている。参加費用は一〇万円から二〇万円以内が基本であるが、研修先と実施時期によって異なってくる。

表　「海外スクーリング」実施プログラム

実施年度	研　修　先	研　修　目　的　及び　内　容
2001年	フィリピン 台　湾	マニラ・セブ島におけるJICAの活動の視察。 台湾の歴史・政治・社会の学習。経済最前線の視察。
2002	台　湾	台湾の歴史・経済・政治・社会の学習。台湾大学訪問。
2003	韓　国	日韓関係の歴史の学習。国連の活動、板門店の視察。
2004	ベトナム／カンボジア ブラジル	メコンデルタの農業視察。カントー大学との交流。シェムリアプ・アンコール遺跡の国際研修。 南米の日系移民史の学習。日系移民社会の視察。
2005	中　国	改革開放政策最前線の視察。パンダステーション訪問。
2006	トルコ	トルコの歴史・政治・経済の学習。日本大使館訪問。
2007	アメリカ 台　湾	ニューヨークの経済・社会の学習。国連本部訪問。 台北の日系企業、高雄の工場視察。政治大学との交流。
2008	スイス・フランス	ユネスコなどの国連組織の視察。パリの歴史の学習。
2009	アメリカ・ハワイ 台　湾	新型インフルエンザ流行のため中止。 〃
2010（予定）	アメリカ・ハワイ イギリス・フランス	ハワイの日系移民の歴史の学習。コーヒー農園訪問。 英仏の歴史と文化の学習。EUの金融経済の視察。

「海外スクーリング」は一年間に二つのプログラムを実施することを目標としているが、ここ一〇年においては、諸般の国際情勢、新型インフルエンザの流行などで研修先を変更、もしくは中止するなどの事態が起きた。また、アフリカやヨーロッパを計画したが、参加費用が高かったため、参加学生が規程の定数（一〇名）に満たず、取りやめることもあった。そのため、ヨーロッパなどの長距離の研修に関して、今年度からは航空運賃が最も安い一一月に実施できることとした。これまでは、授業期間中の実施は禁止されていたので、この点は大きな改革であると言える。実際、今年度初めてヨーロッパを一一月に計画したが、九月よりも一〇万円近く安くなった。そのため、学生の参加状況は極めて良好である。

国際学部は、二〇〇七年に学部改革をおこない、国際協力学科から国際学科となり、「国際学専攻」の他に「地域こども教育専攻」（二〇一一年度からは「こども学科」となる）を新設した。学部改革までは、国際協力を学部の教育テーマとしていたため、「海外スクーリング」の目的も日本のODAの現場の視察、種々のNGOの活動、及びJICAの活動を視察し、時には参加することにあった。したがって、おのずと研修先は発展途上国に限定されることが多かったのである。しかし、中国を初めとするアジア諸国の経済発展と本学部の改革によって、その目的は大きな方向転換を迫られ、研修先はより広範な地域、欧米へと拡大することとなった。そして、このことは学生、特に留学生の希望とも一致することになったのである。

写真　2007年実施の台湾スクーリング：
「世界一高いビル（当時）を背景に」（左）、「高雄のBOTH-WELL社の工場見学」（右）

「海外スクーリング」には当然のことながら、留学生も参加することができる。留学生が最初に参加したスクーリングは、二〇〇〇年に実施したロシアスクーリングであったが、その後三回実施した台湾スクーリングには多くの中国人留学生の参加が見られた。その理由は、中国人の場合、台湾への渡航ビザが取りにくく、特に個人旅行のビザ取得は困難であったことにあった。しかし、数年前から台湾政府は中国人に対する観光ビザ取得の条件を大幅に緩和したため、スクーリングで行かなくても、個人的に旅行することが可能になった。そのため、中国人留学生にとって、台湾スクーリングに対する魅力は減少しているといえる。

それに対して、アメリカやヨーロッパ諸国は未だに個人のビザの取得は、煩雑で困難である。加えて、経済発展のめざましいアジア諸国からの留学生は、かつての日本がそうであったように欧米志向の傾向が強い。彼らが希望する研修先は、発展途上国よりも先進国である。したがって、今後「海外スクーリング」の研修先は毎年少なくとも一方は、欧米諸国になる可能性が大きい。現に今年度実施予定の「イギリス・フランス」の参加予定の半数は留学生である。

また、「こども学科」の新設にともない、その目的に「初等教育」を加えていく必要が出てくるであろう。当然のことながら、初等教育の先進国である北欧諸国への研修が必要となるであろうし、ネパールなどに小学校を建

設するような国際協力活動も必要となるであろう。そうすれば、当初の「海外スクーリング」の目的が復活することになる。このように、「海外スクーリング」を長期的に継続していくためには、その目的と研修先を国際情勢の変化と学生の関心の変化、学部の教育目的の変化に合わせて選択していくことが必要とされている。引率教員は、それに合わせて、常に学生にとって魅力あるプログラムをできるだけ低価格で提供していく努力が必要とされるのである。

e-learning を活用した「海外スクーリング」の支援

敬愛大学の「海外スクーリング」においては、もう一つ特筆すべき近況がある。それは、「moodle（ムードル）」という e-learning システムを活用し、渡航前の事前学習を支援しようという試みである。moodle とは、インターネット上に授業用の Web ページを作成するソフトである。例えば、moodle を活用することで、授業に関する Word や PDF の資料を Web 上に掲載でき、画像や音声等も組み込むことが可能になる。また、許可されていれば、授業で役に立つ Web サイトへリンクを貼ることができる。moodle には、学習を支援する機能が数多く搭載されており、今日では世界各国の教育機関で広く普及しているシステムである。

敬愛大学においては、「千葉圏域コンソーシアム」事業の一環として、二〇〇九年度から moodle の積極的な活用が試行されている。現在では国際学部、経済学部を合わせ、約四〇の授業において moodle のコースが立ち上げられている。通常、moodle のコースは、各教員が自分の授業 Web サイトを独自に構築する方法が一般的である。しかしながら、敬愛大学の「海外スクーリング」においては、コンソーシアム支援委員会と海外スクーリング担当教員が協力し、過去の実績、課題等を共有し、組織的にコンテンツの作成が行われてきた。調査と会議を重ねた結果、渡航先が違えども、コンテンツの共有化が図れそうな学習項目が明らかとなり、教材作成の試行に至った。

では、moodle の「海外スクーリング」コンテンツを簡単に紹介したい。まず、現在では、渡航前の事前学習支援という位置づけで教材が作成されている。

教材は前半、後半から成り、前半では渡航先各国の概要が学べるよう配慮されている。後半からは、渡航シミュレーションとなるよう設計されている。教材前半のコンテンツは、一・「海外スクーリング」担当教員からのメッセージ、過去に参加した学生レポートの掲載、二・渡航先各国の概要（政治、社会、経済、文化等）の紹介、三・渡航先各国の主な社会問題、国際協力活動等の事例紹介、となっている。渡航先の社会・文化に対する基本的な知識の習得と、「海外スクーリング」に参加する意義、参加目的の明確化を図れるよう教材に工夫が施されている。

図　「海外スクーリング」moodle のコンテンツ例

教材後半は、一・渡航先の安全情報の確認、危険を回避する生活の仕方、二・Web カレンダーでの予定表の作成、三・パスポート、ビザの申請の仕方、成田空港での出国方法等のシミュレーション、となっている。現地での生活のノウ・ハウと、出国に関する準備を学生の目線から捉え、それらに必要な支援ができるよう教材が作成されている。

パスポートやビザ、空港までの移動手段に関する情報を掲載する配慮は、留学生の多い本学独自の取組ではなかろうか。これら教材へのアイディアは、先に紹介した学内での組織的な協力体制の下で生まれてきた。今後の計画は、渡航前の学習支援のみならず、渡航後の学習支援を試みることである。スクーリングで得た知識と体験をより内面化し、深い学習が行われるよう教材の開発に取組んでいる。また、学生が渡航後に書き上げるレポートも moodle 経由でスムーズに提出させ、教員といつでも直接コミュニケートできるように計画中である。

e-learning の活用に向けた教員研修

「海外スクーリング」の支援体制の構築は、システム的なハード面の開発のみでなく、人的なソフト面のサポートに関しても同様に力が注がれている。敬愛大学では、コンソーシアム支援委員会を中心に、moodle の基本的な操作に関する FD を展開してきた。

教員研修として「講演会」や「講習会」を定期的に開催し、e-learning に関して親近感が持てるよう配慮を重ねてきた。「講演会」では、学外の専門家を招聘し、e-learning の効果的な運用方法から教材の著作権に至る多様なプログラムで開催してきた。「講習会」では、コンソーシアム支援委員会で三タイプの教員研修を開発し、moodle の基本的な操作を中心に教職員を対象に実施してきた。

写真　コンソーシアム支援委員会（左）と FD 講演会（右）の開催風景

一・「昼休み講習」：一二：一五－一二：五〇までの短時間の講習会（毎週火・木開催）
二・「集中講習」：六〇分間の集中講習会（夏季休業前に二回開催）
三・「個人研修」：希望する日時に特任教員が個別に研修

教員研修のシラバスと冊子も合わせて開発され、「基礎編」では、一・登録、二・シラバスの掲載、三・学習資料の掲載、「応用編」では、四・小テストの作成、五・レポート課題の回収、と章立てられている。二〇一〇年度は、「moodle 学生のしおり」と称する学生向けの小冊子も刊行された。moodle を活用した教育プログラムの実践は、今後も増えていく見込みである。

このように敬愛大学では、国際化教育の充実を図るために、様々な体制作りが積極的に行われている。しかしながら、少なからず課題もあった。一つ目は、moodle を活用した教育プログラムを組織的に展開していくことに努力を要した。e-learning は、face-to-face の対面授業を脅かす存在であるという誤解があったためである。これには、e-learning は既存の教育をより良くする「支援ツール」であり、「副教材」であるという認識を学内に広めていくことで徐々に解決していった。二つ目には、e-learning コンテンツの開発人員及びシステム管理・保守における人員の充分な確保に困難が生じたことである。この問題はどこの大学でも同様であると思うが、今後も限られた予算と人員でシステムを運営しなくてはならない。

以上が、敬愛大学の「海外スクーリング」をめぐる近況と課題である。今後も本学独自の体験型国際教育プログラムの充実を目指していきたいと考えている。